
貴方の大切なお時間いただきます

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方の大切なお時間いただきます

【Nコード】

N9631J

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「まさに僥倖と言うべきかな」

隣からいきなり声をかけられ、私はビクッとして手すりから手を離した。

「こんな夜更けに美人とビルの屋上で二人きり、神のお導きとしか思えないね」

「はい？」

私の隣にはにやけた顔の男がいた。

「まさに僥倖と言つべきかな」

隣からいきなり声をかけられ、私はビクツとして手すりから手を離した。

「こんな夜更けに美人とビルの屋上で二人きり、神のお導きとしか思えないね」

「はい？」

私の隣にはにやけた顔の男がいた。

まさか人が来るとは思つてもいなかった。

今日はやめておいて、またの機会にしようと思つて男を無視して屋上から退散しようとする。

けれど、数歩歩いて、私は思いだす。

屋上の鍵は閉めてきた。

誰も入れないはずのここに、何故この男はいる？

「貴方一体何処から入ってきたの？」

私は手すりを背もたれにしている男に言い放つ。

男は相変わらずニヤニヤとしている。

「何処からつて？そんな細かいこと気にしちゃいけないよ。僕は君に愛をささやきに天から舞い降りた天使、そう言うことにしておけばいいさ」

男はそう言つて、空を指差す。

どうやらこの男、頭がおかしいらしい。

私は鼻で笑つて、男に背を向けた。

「おや、もうお帰りかい？まだ太陽は僕らの蜜月を邪魔したりしないと言つのに。けれど、引きとめるのも野暮と言つものかな。何なら僕が送るつか？」

「結構です」

「そう。じゃあ、また死にたくなったら、僕を呼ぶんだよ。きっと

君の元に飛んでいくから」

私ははっとして振り返る。

男は目を細めたままである。

「なんで？」

「女が一人、ビルの屋上で、思いつめた表情をしている。ありきたりなシチュエーションではあるけれども当たっていたみたいだね」

私は男のかけた鎌にまんまと引っかかったと言う訳か。

「貴方には関係ないでしょ」

「いや関係あるね」

私はこの頭のネジの二、三本飛んだ男を眉をひそめて見た。

「なぜならこの世界の女は全て僕のものだからね」

「・・・不細工な女も？」

「ああ、不細工な女もだ」

「性格悪い女も？」

「ああ、性格悪い女もだ」

高笑いする男を見、私からはため息しか出ない。

さつさと今日は家に帰るべきだなと心でつぶやいた時、その言葉を聞きつけたのか、男が私の肩をガシツと掴む。

「だから、もちろん君も僕のものさ」

男はじつと私の目を見つめ、少しの間を空け、目をつむる。

そして、だんだんと迫ってくる顔。

と言つか唇。

「ふげえ！！」

私は固めた拳で、腰を入れて男の横顔を吹き飛ばした。

「い、いきなり殴るなんて、ひどいよお」

「ごめんなさい。気持ち悪い顔が迫ってきたものだから、つい」

「その言葉、拳よりも痛いよ」

「ごめんなさい」

口では謝りながらも、心では殴られても仕方ないだろうと思う。

「でも、思ったよりも元気そうでよかったよ」

男は埃を払い、白いハンカチを取り出す。

「これは僕からのささやかなプレゼント」

ポンと音を立てて、ハンカチは私の前でバラに姿を変える。

私は受け取らずに眉間にしわを寄せ、男を見る。

男は相変わらず笑っている。

そして、シュツと言う音と共に小さな煙がバラから出てくる。

コホツと私は咳をして、

「それじゃあ、また。美人のお嬢さん」

氣を失う直前そんな言葉を聞いた。

「待てえええ～～！！」

そんな声と共に鍵のかかったドアごと吹き飛んだ。

その大きな音に驚き、目を覚ます私。

飛び込んできたのは茶色のコートに帽子をかぶったおじさん。

息を切らせ、キヨ口キヨ口と周りを見ている。

「遅かったか」

私は先程の男のものであった掛かっていた真つ赤なジャケットをはいで、起き上がる。

そんな私を認め、おじさんがずんずんと迫ってくる。

「お嬢さん。ここで変な男を見なかったか？」

それはあんだだ。

と言いつうになったが、先程の男の事をおじさんに話す。

「やはり一足遅かったようだ。失礼。私はインターポールの大岡と言うもので」

とおじさんは懷から何やら取り出す。

「奴は実は世界的に有名な泥棒です。我々は日夜奴を追っているのです」

「そうですか」

と気の無い相槌を打つ。

「そして、貴方も被害者の一人のようだ」

「え？」

「奴はとんでもないものを盗んでいました」

私はポケットの中やら探る。

何も取られていないようだ。

「いえ、何も盗まれていませんが」

「いえ、確かに奴は盗んでいきました。それは・・・貴方の大切な時間です」

「はあ？」

何言っただ、このおやじは。

全く今日はこんな変人ばかり。

おちおち自殺なんて出来やしない。

また日を改めて。

・・・と言うか、何で私自殺しようと思ったのだろうか？

記憶をたどるが思い出せない。

・・・もしかして、盗まれたものって・・・

そして、私は大岡と名乗るおじさんと共に黎明の空を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9631j/>

貴方の大切なお時間いただきます

2010年10月9日03時55分発行